

授業のヒント

今回と次回の2回で、日本語授業にどのよう
に文化理解を取り込むことができるか、具体的な例を紹介し
ます。

テーマ 外国語学習に文化理解を取り込む

目的 もくてき
日本語学習に文化理解が必要であることを知る。 日本語と自国の文化の共通点と相違点に気づく。 異文化に対応できる力(異文化間能力)を育てる。
学習者のタイプ がくしゅうしゃ
初級以上
クラスの数 にんずう
何人でも

◆日本語学習と文化理解

多くの国や地域で、外国語学習の目的のひとつに文化理解が挙げられるようになりました。外国語学習が異文化理解や異文化間能力の養成に役に立つと考えられているからでしょう。そして、文化の内容も、歌舞伎や茶道などの伝統的なものだけでなく、日常生活の中で見られる習慣や行動様式、物の見方や考え方などを含めて考えられるようになりました。

外国語を学ぶとき、言葉と一緒に文化も学んでいます。たとえば、「いただく」や「いらっしゃる」という敬語が適切に使えるようになるためには、これらの言葉の意味や使い方を知っているだけでは不十分です。適切に使うために必要なのは言葉の知識だけでなく、言葉を使う場面の人間関係や話題などを判断する能力も含まれます。人間関係の理解や、どんな話題の時に敬語を使ったらいいかを理解することは、文化理解です。

外国語の授業では、言葉の学習を通して積極的にその国の文化に接触させることができます。異文化接触を通してさまざまな行動様式や価値観があることに気づかせ、自分と異なる文化を受容する姿勢を育てることを考えたと思います。自分たちとの違いを優劣で評価することがないように、また、珍しい特別なものだと片付けることがないように、自分たちの文化と何が違うのか、また、共通する部分は何かを考える機会を作るといいでしょう。違って見えるものに共通点が見つけられれば、親しみ

を持つことができます。同じように見えるけれど細かく見ると違っていることがわかったら、興味や関心を強く持つことができるのではないのでしょうか。

異文化を理解するための活動を通して、複数の視点からものごとを見る、すぐには理解できないことに会ったときに少し立ち止まって考える、といった力をつけたいですね。それが異文化間能力の養成につながるのではないのでしょうか。

◆文型練習に文化的要素を取り込む

文化理解のための学習は、そのために特別に時間を設けて扱うこともできますが、普段の言語学習の時間に、例えば文型などの練習をするときにも文化理解を促すことができます。その例を紹介します。

文型：(いつ) (人) に (物) をあげます

目標：自分や家族、地域や国の一般的な贈り物の習慣について話すことができる。

日本の贈り物の習慣について学び、自分たちの習慣と比べる。

活動：

①基本的な文型練習の後で、タスクシートAを配る。

<タスクシートA>

いつ (どんなとき)	だれに	なにを
例) 友だちの誕生日	友だち	カード

②まず一人でシートに記入し、次にグループで報告し合い、共通点と相違点があることを確認する。

③さらに、クラス全体でグループの結果を報告する。共通するもの、個人によって違いがあるものを確認する。

④日本の贈り物の習慣と比較するために、教師が情報を提供する(タスクシートB)。このとき、すべての情報を記入せず、教師のヒントを聞いて穴埋めができるようにしておいてもよい。そして、自分たちの習慣と

の共通点と相違点について、考えを述べ合う。学習者のレベルによっては、この部分を母語で行ってもよい。

<タスクシートB>日本の贈り物の習慣

いつ (どんなとき)	だれに	なにを
1月1日 (正月) がついついたち しゅうがつ	子どもたち こ	お年玉 (お金) としだま かね
2月14日 (バレンタインデー) がつ か (ばれんたいんでー)	好きな男の子 す おとこ こ	チョコレート
お見舞い みまい	病気/けがをした人 びょうき ひと	花、お菓子、 かし 果物、など くだもの
母の日 (5月第二日曜日) はは ひ (ごがつにちようび)	母 はは	赤いカーネーション あか

◆会話に表れる日本の文化に気づく

日本人に「また来てくださいね」と言われて、数日後、訪問したら驚かされてしまった、という話があるように、会話の中に、それぞれの文化の習慣や価値観が表れることがあります。日本語で話すときは、外国人でも日本の言語習慣で話さなければならぬわけではありません。しかし、日本人の言動を理解し、日本人と円滑なコミュニケーションをするためには、このような言語習慣を理解し、使えるようにしておいたほうが良いでしょう。

ここではほめられたときの答え方を例にみてみましょう。

<ほめる/謙遜する>

A: Bさんは絵が上手ですね。
B: いいえ、それほどでもありません。

目標: 相手のことをほめることができる/ほめられたときに謙遜して答えることができる。

会話の中にも文化によって違う習慣があることを知り、日本の習慣と自分たちの習慣を比べる。

活動:

①イラストを見ながら、A、Bに入る言葉を日本語または母語で考える。「～が上手です」の文型の導入がまだの時は、導入・練習をする。

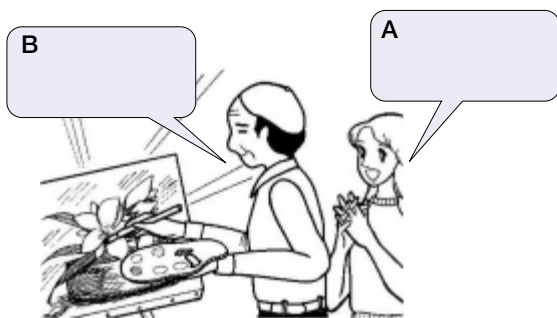


イラスト:「みんなの教材サイト」より

- ②Bの「いいえ、それほどでもありません。」の意味を確認し、このような答え方を母語でもするか、するとしたらどんな時か考える。
- ③その他の自分がほめられる例、自分の家族についてほめられる例を出し、自国の表現と比べる。

A: Bさんは日本語が上手ですね。
B: いいえ、まだまだです。

A: (Bさんの) お嬢さん、ピアノがお上手ですね。
B: いいえ、とんでもない。

④さまざまな事柄についてほめる、謙遜して答える練習をする。

⑤「自慢すること」「謙遜すること」について、自分はどうか、他の人はどうか、考えを述べ合う。

⑥日本人とのコミュニケーションで、このような場面になったらどうするか、考えを述べ合う。

留意点:

- 日本人は必ず謙遜する、自慢しない、という一般論にならないように気をつける。
- 同じ文化の人でも、考えや行動に違いがあることを認める。
- 日本人と日本語で話す場合は、日本人の言語習慣に合わせてなければならないという考えにならないよう注意する。

この「ほめる/謙遜する」の言語習慣が自国のものとよく似ている場合は、違いについてことさらに取り上げる必要はありません。文化差が現れやすいものとしては、依頼や誘いに対する断り、反対意見の言い方、電話での会話、挨拶の表現、話題の選択などがあります。みなさんの学習者に合わせて文化差を考慮することができる会話練習をしてみてください。

参考文献

「海外の初中等教育における日本語教育と〈文化リテラシー〉」『21世紀の『日本事情』3号(2001)矢部まゆみ』
“Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century” (1999) National Standards in Foreign Language Education Project
http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-1usa.pdf
http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-2USA.pdf
『文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト作品集』第1～3回(1997～2000)国際文化フォーラム

このコーナーの担当者: 阿部洋子、中村雅子 (日本語国際センター専任講師)
読者の皆さんからのアイデア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。